

◆ 教育実習に想う ◆

先週から、教育実習が始まった。国語・英語・保健体育の3名の実習生が、それぞれの目標に向かい真摯に実習を続けている。いずれも本校の卒業生。それぞれ剣道部、バスケットボール部、ハンドボール部で汗を流してきたとのこと。職員室で、何やら担当教諭から指導を受けている。指導教諭も若手である。昨年の今頃はcovid-19の感染拡大の影響で臨時休業が続いていたため、教育実習は9月に順延された。あれから8ヶ月。まずはいつもと同じ時期に実習を始めることができたことを喜びたい。子どもたちのため、充実した実習になるように願う。

実習の開始に当たり本校の先生方をお願いした。時期はともかく、私たちは皆、教育実習を経験してこの場にいる。実習生は卒業生でもある。彼らに誠実に関わっていきましょうと。

1983年の9月、都内にある、まだ残暑厳しい大学の附属高校で実習を始めた頃を思い出す。同じ時期、「大韓航空機撃墜事件」が起きた。様々なことが重なり、教員へと進路を決定する大きな契機となった。

本当に偶然だけれども、総合学科高校の前任校で全国関連の大会で出張した際、教育実習で一緒だったN氏と再会した。大分県の総合学科高校の校長になっていた。最近のことはあまり頭に入らなくなったけれど、あと頃のことは良く思い出す。そういえば、「地理」の実習生は4人いたけれど、あと2人は現在大学教員である。

教育実習の冒頭、実習生に話をする機会を設けてもらった。

昨年度から何度も取り上げてきた「**藤高クオリティ**」について考えてもらいたかった。皆さんもこの「温かな」雰囲気の中で生活してきたのでしょうか？ と問うと柔らかな笑顔が返ってきた。本当にいい笑顔だった。きっといい時間を過ごしてきたのだろうな、とうれしくなる。厳しい状況下ではあるけれども、仲間たちとともに夢の実現のため、そして後輩たちのために頑張りたい。

